

薪の王 間違い 勇者 自己犠牲

エリザベートベーカリー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

書き直します by 作者

目 次

【成れの果ての墓所】					
【墓石の集合墓地】					
『飛竜殺しのヨア』					
『拉致』					
【闇派閥の盗賊団地】					
『闇派閥の盗賊団地2』					
27	22	17	12	5	1

【成れの果ての墓所】

最初は、いつだつたか

最近はそればかりを考えるようになつてしまつていた、怪物の発生源、迷宮の謎の究明、そして自身の能力値を上げるであろう戦闘怪物、怪物、見渡す限りの怪物を飽きもせずに一定の場所へと投げる、それは計り知れぬ闇へと投げる、ただそこにある闇

元は山であつた場所は幾度の竜、巨人、そして悪魔、地獄のような戦争により怪物の血で作られた闇の穴になつていた

或る時は勇者、ある時は獣、そして最近はただ歩くだけの成れの果て、鋸びた剣を持ち、毒を喰らい、火を喰らい、そして命までも喰らつた

だが最早ただ歩くことしか出来ぬ者となつていた、私はある時にその意識を無くしていた、ただ本能のみで存在する私、飽いた

ああ神よ、例え悪魔でも構わぬ、我が願いを聞き給え

ただ、私に死をくれますよう、不死として叶わぬ願いだとしても、此度の火継ぎにて終わりにしようではないか

ただそこに座る、ただそれだけだが自身の足はまるで風を数百年受け取った岩壁のよう

に崩れ落ちる、グシヤリという血と土に濡れた音が自身の耳を侵略した

ああ、あと僅かなのが魂が持たないのかね、自身に言い聞かせるように言葉を発した私だが、支え、手に持つ大剣もついに限界が来たか

まるで役目は終えたと言いたげに中ほどから碎け散つた、だが、まだ、まだ最後の工程が残つている、幾度も失敗し、幾度も奪い、幾度も世界を周回し

だが今回で終わりになつてしまうのだろう?

はたして、それは自分の声だったのか？あらゆる時代から古き不死人、そんなものに正気があったのか？それすらも分からぬ程に摩耗した自意識に問い合わせるように自分で手にある捻じり狂つた剣を目にした

ああ、なるほど、そういう事か、幾たび蘇り燃えカスを削り取り自身を燃やす、延命、世界を無限に延命する機械となつた私は啓蒙を得た

無色の魂、無蒙の色、あらゆる物を吸収し、怪物を殺しつくした私ならではの延命法ではないか、懐かしい、数万年前に存在してた筈の子供時代を思い出す

【そうだ、勇者とは自己犠牲であつたな】

擦れ擦れ、ついに喋る事もできなくなつた喉からそのような言葉が聞こえた、そうだ、私はこのような声であつた、壯言で幼く、女であり男である

そして世界よ、目にするが良い、これが究極の自己犠牲、ただ永遠に燃えカスになるだけだ、不死人なんてそういうもんであろう

自身の胸に火継ぎの凱旋剣を突き刺す、ただそれだけでよかつたのだ、念願の死を手に入れた私はゆつくりとその眼を閉じていった

「灰の人よ、いや、成れの果て、これも正しくないな、二代目薪の王者
よ、まだ聞こえておるかね？」

原初の死が燃える

「今や闇の光は失墜し世界には太陽が溢れかえった、でも原初の火も
消えてしまつたわ」

あらゆる物の果て、魔女とあらゆる原初の混沌の母が燃える

「不死は完全ではないがいなくなつた、我の願いその通りに我が娘や
息子たちは繁栄し人類と共に歩んでいくだろう」
不死だけを救えなかつた原初の薪が燃える

「だが、それは我らで事足りる事が今に分かつた
故も知らぬ薪たちが燃える

「だからこそ、君の魂は解放する」

いつかに出会った不死たちが燃える

「勇者は勇者でなくてはならぬ、世界はまだ貴様を捨てぬ、ククク」

ただ愛を欲していた抱かれ騎士が燃える

「だからこそだ、全部このソラールに任せておくが良い」

「なあに、ただ俺の願いが叶うのだから容易い物だ」

「ゆつくりと幸せになってくれ、俺の太陽よ」

俺の、私の、太陽が、最後に燃えてしまった

【墓石の集合墓地】

ある山の奥、そこには名も知れぬ者達が埋められているさびれた無人墓地がある、ある村のある山にいるあるモンスターに挑んでいった者達を弔い：の筈である

だが墓地にある筈の墓石は乱雑に積み上げられ、遠く東の者達が見ればそれは賽の河原と称するであろう、

それはまるで死者が下から這い出てくるのを押さえつけているようだが、死者は蘇らない、故に無人墓地、誰もが寄り付かぬ場所そして名を刻むべき表面には爪で乱雑に横線が書かれている、その傷跡は名ではなく、自身に傷を受けた勇猛さを描いている、そう、ここは無人である

竜がいないとは言つていない

無人墓地に寄り添うように生えている大木、それはまるで原初の母のように墓地を見下ろしている、大木に意思があるかどうかは誰も分からぬ事柄であろう

それは大木の下で寝ていてる竜を以てしても分からぬ、この大木は竜が生まれた時に既にあつたのだから、竜がここに墮ちた時には既にあつたのだから

肉の抉れた足を起こし、傷のある鱗を揺らし、だが燃え尽きぬ眼で周囲に地ならしを起こし、墓石に群がつていた小さき怪物たちを追い払い

そしてまた足から頭までを土に降ろす、最近は墓地に来ていた奇特性の人間たちも来ず、ただその身が朽ち果てるのを待つばかりであつた

怪物が何故小さき怪物たちを殺さぬかは本人、いや本竜ですら分からぬ、ただ自分よりも強くない相手、そして自分の歯向かわない相手に殺す価値はないと断定しているのかも知れない

【おい、これをどかしてくれないか】

そして竜は墓石に向かい火を噴いた

何が起きたのかは竜にも分からぬ、誰かの声が聞こえた、それだけの理由で土が見えぬ程に積み上げて来た墓石を炎のブレスにて全て焼き尽くしたのだ

誰だ？何だ？ついに死者が蘇ったのか？それとも我が母達のように、ここは人間種族専用の迷宮の様になつたのか？疑問が浮かんでは消え浮かんでは消える

先程久方ぶりに炎を吐いたからか口の端にはいまだに炎が猛り、そして鼻部分はブレスを吐いた時にだろうか、既に骨が見え隠れしている

…だがそんな程度である、ブレスを吐き終えた竜は何事もなかつたかのように身体を全て土に降ろし、また先ほどまでのように寝始めた

【…ここは、どこだ？】

誰とも知らぬ墓所から、一人ぼっちになつてしまつた魂が起き上がる、皮と骨だけとなつている姿は正に亡者だが先ほど墓石の山から這い出て来たのだから

動く死体と言つた方が正しいのだろうか、ただ、それは冒険者の遺体が無理をして動いているだけだ、中身である魂はまったく違う

故に過去刻まれた筈の神の恩恵は消え失せており、その背にはただ命を奪うに匹敵する傷跡と、肉が全くないやせ細りすぎている背中だ

けだ

顔を左右に揺らす、クラクラと脳が揺れる感覚がする、そうだ、この体はちゃんと人間である、故郷無き小人でもなければ

どこかの生きている人間の身体を自分の魂を乗つ取つてゐる訳でもない、身に纏う甲冑は鎧びて使い物にならないだろうが、この際身の着などどうでも良いだろう

ただ重いだけだが不思議とこの重さが自分が認められていると、生命の息吹を認められていうという気持ちになる、過去出会った『筈』である

アストラのアンリの従者、そして守護者だったホレイスも同じ気持ちだったのだろうか？

彼はあの分厚い鉄の内を好み、そして考察に過ぎないがロンドールの連中に殺されたのだろう、陰鬱な助言に誘われて死んだのだ、疑似餌に引っかかる魚の如く

王などとくだらぬことを言つてたゆえに全員殺しつくし、そして三代目、王の薪となつた時に全て燃やし尽くしてやつたが今でも生きているようならまた絶滅させるか

あやつらの奇跡やら魔術やら道具は全て実践的な物しか無かつた、故に使いやすかつたが、本当に全て燃やし尽くしてしまつたからな、カーサスの本都市のような砂漠になるまで

閑話休題、一人考えるとずつとうーんうーんと唸つてしまふのは悪い癖だ、何代にもずっと出会つてきたカタリナ騎士たちの癖でも受けてしまつただろうか

考えるだけの脳みそが残つていると確かめるには良い方法だ、恐らく最初期組の不死者だつたのだから、いつ脳が亡者になつても不思議ではない

だが未だに亡者になつていないのでからこの先も亡者にならないだろうなという確信があつた、それは普通の人間が持つ根拠のない自

信そのものだ

閑話休題

今現在自分の姿を確認する、この姿身の過去の姿は騎士だったのだろうか？およそ機動性を無視し硬さだけを目指した装備のようだ、だが鎧が目立ち、更に長い年月故だろうか

およそ厚すぎたであろう騎士頭はその厚さを減らし、单なる革のヘルムに防御力が負けているだろう、だが見た目が好きなので頭はそのままにする

だが頭以外が全て駄目だ、胴体甲冑の背中は切り裂かれ肌が露出している、腕は指甲は熱で全ての関節が融合しており更にその上に鎧びが目立つ

足甲冑など経年劣化により足全体を包んでいたであろう鉄よりも硬きフルブーツは脚に鉄の輪を残すのみである、故にその辺に散らばっている防具から使えそうなのを見繕ろう

その結果が頭の中に浮かぶソウルの記憶、その装備欄を見る

鎧びた甲冑頭
鎧びた全身鎧
鎧びた鉄の腕輪
鎧びた鉄靴と破れたズボン

である、実に良い、最初であつた筈の私はただ騎士の鎧と柄だけと成つた剣だけであつた、それからあの上級騎士の願い、いやの呪いにも近しい不死人生が始まつたのだ、だ

があの時よりも今回は實にひどいようだ

身を守る防具、鎧びた全身甲冑はただ重いだけ、これでは盗賊の装束の方がまだ命を削り取る力を減らすだろう、だが不死者に命を削り

取る力など意味を為さないだろう、見た目が好きならそれに執着する、変態だ

ダークリングが現れた日から人は、故に亡者は変態へと最終的に変貌するのだ、変態へと変態する、仮面ハベル：アヴエリンダヴエリン：量産されるヨームの大鉈…うつ頭痛が痛い。

防具は得た、あとは武器だがまともな物が無かつた、私の周りに広がるのは騎士や魔法使いや盗賊な意匠を持つ者達の遺体、そして炎によつて碎かれた墓石、故に武器はあれどほとんどが折れた直剣か折れた杖だけだ

試しに折れた杖を拾う、そして持ち上げる頃には既に灰へと変化している、指の間からこぼれる灰の塊はあのドラゴンの討伐を夢見た者なのだろうが、不死以外の者で竜殺しなど単なる人間では無理だろうなあと思う

確かに竜を倒す事は騎士の誉れであるが、それでも勇気と無謀と吐き違う訳にはいかない、それは不死人にも人間にも言えるだろうが、その先にあるものを追い求める故に誰もが竜に挑むことをやめられない

ふと墓石を踏みつぶし粉々になつた石の塊をどこかへ投げ飛ばすと、カコン、という聞心地の良い音が鳴る、不死人は目ざとい上に耳ざといのだ、小石を投げ飛ばした場所に向かった

そういえばこんな風にアイテムに吊られ殺された事もあつたあと、不死人はまるで良い思い出のように過去を頭の中で絵描いた、死とは不死にとつて良い刺激となつてしまふ、故に世界は不死を許さなかつたのであろう

死という終わりが無き生物が世界にあふれるなど、それは許されぬ大罪である為に

小石が飛んでいった方向へ向かう、人の手入れが行き届いていない森は実に歩きにくい事この上ないが黒い森の庭を思い出す、何故だろうか、先程から昔の事ばかり思い出してしまふ

自分しかいないからか頭の中が鮮明になつてゐる、今は最後の火継ぎから何年たつたのだろうか、そんな事を考えていれば木から枝分かれれた葉に頭があたる、今は今の事を考えねばならない

最後の草を書き分けると、そこには幻想的な光景が広がつていた、竜の死体だ、先ほどの竜とは違う竜だろうか、もしや番だつたのだろうか？古竜が番を得るなど聞いた子も見た事もないが世界は広いのだからあり得る話だろう

そして頭には鎧びた大剣が突き刺さつてゐる、それは古き物語、英雄譚に登場するような大剣だつたのだろう、が、ドラゴンの血に濡れ今や鎧が全身に走つており、刃から柄、鍔から握りが全て鉄さびの匂いで支配されている

だが何故だろうか、この剣を見るとひどく懐かしい思いが自身の中に生まれ落ちてくる、不死には過ぎた感傷だろう、だがそう、思つてしまふ

握る、ギチギチとドラゴンの肉と骨を噛んだ大剣を引き抜くと切つ先を上に掲げる、ふむ、實に良い剣である、銘が書いてあらう場所は何かの一撃でも貰つたのか融解し、そして凹んでいる

これではたとえ書いてあつたとしても読めないだろう、無論文字がいささか変わつてゐる可能性が無きにしも非ず、あの時代で言えば文字が読めただけでも仕事に付けたが今はどうだろうか、不死人が将来の話など不吉極まりない

故にだろうか、複数の方向から体に突き刺さる、ああ、やはり不死人が将来の、それも不確定な日常にのめり込みたいなど許さないと

【「そうか、貴様ら全員そう言いたいか、我の忘れ形見程度が言う様になつたな】

黒い、くろい、kuroi、偉大なる世界のバグが現れた

『飛竜殺しのヨア』

「闇の世界の亡靈たち」が侵入しました

目の前に現れた黒い影の集大達はゆらい、ゆらりとまるで軟體生物のように、人間としての骨格を無視した動きを披露しながらこちらへと近づいてくる

だが途中で気づいたのであろうか、その黒い塊は竜の遺体をひとつ眺めると膝立ちに右手を胸に寄せる、それは誰もがこう判断するだろう、祈りだ

それも強き存在に相対した時の死からの祈りではない、真摯な、正

しく信仰をしている存在への真摯な祈りだ、この竜に何かしらの関係を持つていたのだろうか

だが次の瞬間に彼が見たのは、騎士であつた、身の丈を超す大槍は黒く僅かに滴る緑の液体は地に落ちるたび草木と不死の命を奪うに十分な猛毒のようだ、そしてその英傑を讃えるように装飾の施された見事な全身甲冑を持つ騎士だった

『我が名は竜を狩りし英傑ヨア、貴様は我に殺される生贊になつたのだ、その体を貰い今度こそ私は全ての竜を殺しつくし真なる不死の英雄となる』

耳をつんざき臓器をも体をも揺らす程の声量、確かに英傑ではあるようだがヨアと言えば私の世界では絶望を焚べる者により事実を打ち明けられた名があつたな

【ヨア？ああ、貴様には愉快な二つ名があつたな、自業自得の大まぬけ野郎だ、貴様の物語は大ウソつきが最後にはひどい目にあつて死ぬという反面教師の繪本にあつたな】

怒りに我を忘れた者ほど降ろしやすいモノはない、空を飛ぶドラゴンであろうが自身のブレスだけでは物足りず、その図体で、足で、尻尾で、腕でその者を殺そうとする

では人間はどうだ？腕で、足で、手に持つ道具でそのものを殺そうとする、目の前の自称英傑もやはり人間の範疇にあるが為に槍を力任せに叩きつけてくる

横へのローリングで躱し返す刀で剣先を相手の脇へと突き刺そうとするが強引に振り払われた大槍で大剣ごと自分の体が吹き飛ばされる

確かに力と技量だけは英傑の様だ、だが不死の彼でなくとも定められた命を持つ者の者であればヨアを見ればこう思う、まるで大人の力を持つた子供だ

故に未熟、故にただ不死とだけの私でも勝てる、鎔びた防具や鎔びた大剣でも勝てる、これでは英雄グンダの方が強い

躲し切り付け、叩きつけを受け流し、鎧で守れていらない脇に大剣を叩きつけ、力任せに振るう槍を懷に飛び込み回避しては切り付ける弱い、が、確実的に体力を削られていくヨアは大槍を力任せに振り下ろす、躰され切り付けられる、だがヨアは切り付けをモノともせずに大槍にて横殴りにするが自分よりも低い者を相手にしているのだ、それを大剣という大きさにて忘れたヨアは腕の甲冑を大剣にて逆に叩きつけられる

『まずい、まずいまざいまざい』

口には出ていないがこの状況は確実的にヨアの命の灯を確かに減らしていた、いやらしく、そして惨たらしい、不死人特有の戦い方にヨアは慣れていない

自分よりも大きい物を相手にしていたヨアは確かに英傑と呼ばれるに値する、だがそれに相対するのはほとんどの者とモノが自分よりも大きくそして強大なモノを相手にしていた人でなしだ

死ぬ？この英雄ヨアたるオレガ？

『この技にて勝負を決するとしよう!!』

そのような恐怖はあつてはならぬ、故にヨアは叫んだ、恐怖心を消すために、沈下しつつあつた本能を刺激するために大槍と大剣の重なる音がする、俗にいうつばぜり合いという形になつたが、自称英傑と言えど身長と体積はそれに見合うモノを持つており、対してこちらは故に知らぬ小人である

大剣側である私が跳ね飛ばされ、ヨアは勝機とでも言いたげに、跳んだ、その高さは古の竜の首に匹敵し、これによりヨアは何体もの飛竜と狩ってきた

古の竜の首に刺さる程の剛腕、それに高さと落下というモノを足したヨアの必殺の技、この技にて飛竜も、そして古の竜をも倒してきたヨアの自慢の技だ

森全体に届くほどの土煙が巻き上げられる、それは最早神々と古竜との戦いに匹敵しよう

だがこれは単なる格上殺しの戦いである、そう、弱者であり強者である不死の勇者に馬鹿が勝てる道理はない

ゾルリ、と不気味な音を立ててヨアの首が落ちる

『な、ぜ』

【落下した後隙だらけだマヌケ、オーンスタインのように対人戦も鍛えずに英雄とは片腹痛い】

そう言われた時のヨアの顔はどんな表情を浮かべていたのか、後悔か納得か、それともただ馬鹿の一つ覚えのように怒りだつたのか
それは竜血の兜に隠され見えずにその顔を地面に落とした

V
I
C
T
O
R
Y

A
C
H
I
E
V
E
D

『拉致』

ヨアの大槍を拾う、およそ私の体よりも大きい大槍だ

今私には使えないだろう

試しに握り片手で振るつてみると重さ故に振り回せば私の手から槍が零れ落ちて行つた

両手で握つてみると、どうにも上手い振るい方が思いつかない

今私には筋力も技量もまるで足りていらないのだろう。

とりあえず大槍は自身のソウルへと溶かし、鋳びた大剣を背中へ背負う

いつも通りの旅であれば何かしらの道先を示すアイテムが手に入る所なのだが

周りを探しても由来の分からぬ弱いソウルか、鋳びて朽ち果てた武具達しかない

まるで墓場の墓場としか言い表せぬ場所だ、二回目の火継ぎの時を思い出す

「どうしたものかな、火が続いているのかも分からない、旅の目的すら分からない、これでは何故私が復活したのか何も分からんな、この鎧もどこの時代の物なのか…」

溜息を吐きその場に座る、まるでただ復活しただけだ

騎士の時代に存在していた筈の休暇の様だ、そもそも火継ぎの王に休暇があるのか

一体なぜ私は復活したのか、意味を探そう、自己犠牲だけが生き様なのだから

不死者である私の責務を果たさなければならぬ

【…とりあえず道順を歩くか、いつも通りに】

一回目の時は崖に到達すれば鳥に運ばれ、二度目の時は篝火でロス

ロック城へと

空は飛んだし転移もした、次はゆつたり歩いて行きたいモノだな

【…これで地下に潜るなんて事になつたらあとは泳ぐだけか】

無論あなたはカナヅチであるし、重い鎧を着たまま泳ぐことなど不可能だろう

良くて気絶し浜辺で目覚めるか、悪い場合溺死か叩きつけられて死ぬ。

やはり水場に良い思い出はない。

竜を殺せど神を殺せど武技の達人を殺せど水場だけは克服できそうにない。

完全な生物を殺す事は出来ようとも完全な生物になる事は出来ない

それが不死者としての呪いなのだろう、成長はするが進化は出来ない

不完全という単語がもつとも似合うだろう

何がが一つだけ足りないというナニカ

誰も言い表す事の出来ない違和感という嫌悪感

【まあ、どうでもいいか…それこそ人間らしいと言うものだろう】

ウームーウームと唸りながら答えの出ない自問自答を繰り返す事二度三度

【…グウ…グウ…フゴオ…】

私は何時ぞやに知り合ったカタリナの騎士の様に胡坐をかけて寝てしまつた

【…ンゴ?】

どうやらあの後戦いの疲れにより寝てしまつた様だ、周りに特に問題はと氣を配ろうとして気づく
下半身から伝わるガタゴトという振動から察するに寝て いる間に私は何かに乗せられているらしい
顔には何かを被せられているのか目の前は夜のとばかりの様に真っ暗だ、何も見えん

「し……ら、コイ……ど……す？」

「俺……よ、適……奴……人か闇……闇にでも売……だろ」

「ど……せ氣狂……ろ、あんな場所……胡坐……搔……たんだぜ？」

どうやら聞こえる声から察するに盜賊の一団にでも捕まつたらしい、我ながらドジを踏んだ
どうせ当てもなく歩こうとしていたのだ、このままこいつらに拉致されるとしよう

死んでもどこかで生き返るという結果論だけで言えばむしろタダで情報が手に入つて一石二鳥だ

痛い物は痛いが、まあ痛いだけである

鎧の音をたてながら起き上がる、ガツシヤガツシヤと五月蠅いが間に合わせの全身鎧故に仕方ない

何故かソウルによる最適化が出来なかつたことにより部分部分の
サイズはバラバラ

キツかつたり緩々だつたりと様々な物を上からベルトで無理矢理
締め上げていいだけだ

さて剣はどこかなど手探りで背中を触つてみると、そこにあるべき
大剣の感触は無く

鋸びついた鎧を鋸びついた手甲で触つたことによるギチチチとい
う氣色の悪い音しか上がらなかつた

これはまあ予想できた事だ

光の導き^{ロックオンカーソル}で敵対する存在を確認し近くに何でも良いから武器になる
存在を探つているとどうやら私以外にも捕えられた存在がいるらしい
事が分かつた

光の導きは敵対する存在以外には反応しないという欠点があるが
故に気づいた理由は接触である

事故の様な接触、自分の右手の感触から伝わる柔らかな肉体的な温
度

そして同時に伝わる規則的な間隔で繰り返される音、男子として生
まれたからには一度は触りたい

そう、私の右手は今向かいに座つていたグラマラスな肉体を持つ女
性の胸をわしづみにしていた

「…っ!?～～～～!
!?!?！」

絹を裂くような悲鳴と共に、お互い見えていないはずの私の頭頂部
と顎を両手で掴まる

それはまるで格闘技の達人が繰り出す絶技とも言える必殺技の如
く自然に行われた

次に響くボギンという肉体から本来発せられるはずの無い音、そし
て本来想定していない筈の動き

要するに私の首の骨は見事今までの一回転をくらつた事により意
識を遠のかせる事となつた

【闇派閥の盗賊団地】

何年前かは不明だが『不死者とは何を得てして不死者と呼ぶのだろうか?』と聞かれた事がある

未だ記憶に新しい前回の火繼ぎの時に、物乞いの少年に聞かれたのだ

あの齢にして、そしてあの亡者の街にしてあそこまで純粹であり、燃え盛る薪のような目をした少年には私の最古の記憶から遡つてしまも出会つた事はない、不思議な少年であつた

少年は何故私にそう聞いたのだろうか?私のうちにある薪の王としての役割を嗅ぎ分けたのか

ダークリングの正体を知ろうとしたのか、それとも偶々聞いたのが私だつたのか、今や分からない

少々考えた後、私は答えた

【首の骨を折ろうとも死なず、心の臓を碎こうとも死なない奴】

この答えを聞いた時の少年はどんな顔をしていたのかは分からなり

い

口でも開けて呆れていたのか

それとも私の意見を比喩表現だと思つたのか、どちらにしても今の私には関係ない事だろう

関係があつたにしても今の私は首を折られたから喋れない事だしながら

首の骨が座らずブランブランと振り子のように動く視点には何時になつても慣れる事はないだろう

目の前の私の首の骨を折つた存在は、まるで動く死体でも見たかのようによく呼吸になつてゐる

加えて目を閉じた時に私が殺しにかかるとでも思つてゐるのか気絶はしないままに泡を吹くという

不死者ですら再現が難しい様な器用な事をしてゐる、ただ氣絶寸前なのは間違いない

すると馬車の動きが止まつた

急に止まつたせいで私の首がグルングルンと見事なまでの円を描き回転する

ブチブチと筋繊維が引きちぎられるような音がするが、不死者故に痛みは無く

【そろそろ治すか】

手に食い込んでいる縄を片手の骨全てを外す事で解くことに成功する、発生する痛みは無視する

【なんどやつても首の骨を嵌める時だけは慣れんな】

座らない首が不規則な動きを繰り返したままに言いながら

更に筋繊維がちぎられる音に加えて、骨を軋ませる気持ちの悪い音を大きく響かせながら、

自らの首の骨を折れた部分とくつ付けようとグリグリと押し込んでいく

まるで機械仕掛けのような音を喚き立てた後、私は首を試しに鳴らしてみる

ペキ、パキという生々しい歯車の様な音が体の内から響き渡る、どうやら良い感じに嵌つたらしい

さて、外の連中をどう排除するか考えようと頸に手を置くが、真つすぐ行つてぶん殴る

それ以外に良いと思う作戦が考え付く事はなく、往々にして王道で基本な作戦になってしまった

だが自分にとつての基本は積み重なつたからこそ基本なのだ、だからこそそれが一番良いのだ

一回目の火継ぎの時に師匠のこの事を喋つた事がある、その時には溜息混じりに

『クラーグもお前と同じような事を言つてたのを思い出したよ、この馬鹿弟子め』と言つていた

あの美女な顔をして私と同じような武力行使大好きつ子だつたとは、目から鱗だと思う

そんな事を考へているとギイ、と音を立てて馬車のドアが開かれる音がする

ドアの隙間から見える
さて、虐殺リハビリとしやれこもう

不死者が説明する斬新でもない殺戮講座の時間だ、最早何度も分からぬ

一対多数の時の戦法

そして戦闘中に別の事が考えることが出来るようにする事と戦闘の流れに乗る為の特訓だ

「おい、どうし…なんだ」

レッスン1はまず最初に入ってきた奴に向かつて兜を投げつける人間というのは飛んできた物を掴むか避けるように出来ているらしくこれをすると数舜の隙になる

不死者はその辺の反応が全て死んでいるからな、人間にだけ使える戦法だ

どうやらこの盗賊の男は掴むタイプの人間だつたらしい
レッスン2は隙を見逃さない事

「つが」

兜を掴むという隙を樂々と見せてくれた、今の状況はあまりに作戦に嵌り過ぎて笑い声が止まらなくなってしまう程だ、これでは理性無き亡者を相手取るより簡単だ

相手の頭と頸に手を掛けて円を描くように何事もない様に回すバキンという心地よい音を奏でると同時に目の前の盗賊は命を私に盗まれて死んだ

これでは不死者でも起き上るのは難しいだろう、不死者でないなら骨を折った時点で盗賊の体は生命を停止させる事を選んでしまう程、自分で言うのも何だが見事な技だ。

先ほどの女性の胸を揉んで、この必殺技とでも言えるコレを覚えたのは英断だったかも知れない。

レツスン3は何もかもを利用する事だ、人間の感性など考えずに獣の様に全てを見定める事

倒れ伏そうとする盗賊を近場にいた二人目の盗賊に蹴り飛ばしたすると不死者ではない、普通の感性を人間である盗賊は死体を受け止めようとするだろう

そんな隙を見逃す不死者はいない

死体から奪つておいたダガーを死体でバランスを崩した盗賊の首に刺し込む

自分の着ている甲冑の重みも足されたのか、手入れも碌にされていない筈のダガーはすんなり肉を通り抜け、間にある血管達を蹂躪し中身である赤い滝が吹き上がる光景を作り出した

頭の中に致命の一撃という単語が浮かぶほどに見事な暗殺を繰り出せた気がする

これは生きていく上に将来役に立つ技術だろう

限りなく続く不死者の生に置いて忘れる事のできない感触、良い感触だ。

我が腕により命を奪う感触、いつ手に持つても魂、ソウルが我が内に入るのは心地が良い。

無論、奪いたくないソウルというのも確かに存在している、良き隣人のソウルなど奪いたくはない

【さて、とりあえず手錠だけでも破つてしまふか】

先程殺した盗賊の遺体からは白い煙の様な物が立ち込んでいた、それは彼らの魂という訳ではなく

不死に成った時から見えていた篡奪の証、自分のソウルに適合する武器か防具か、はたまた道具か

不死者は彼らに近づくと煙の発生源を手に取った。

片方は冒険者のダガーという武器、そして片方は盗賊団地の鍵というアイテム達だった

【先ほど利用したダガーはソウルに適合しなかつたからな、丁度良い

か

鍵を利用し手錠を外した不死者は冒険者のダガーを手に取ると目を瞑る

そして握ったダガーに記された魂の記憶を読み込んでいく
【筋力補正無し技量補正低ランクを保持が、良くも悪くも質の悪いダガーダナ】

ため息混じりにダガーをソウルに溶かし右手の部位に登録する
スロットは二回目の火継ぎの時同様に三つだ

一つ増えていた時には驚いたが結局三つ同時に活用する事は無く
宝の持ち腐れだつた

さて、そう声を発しながら殺意を出した

会話から聞こえた声の種類を察するに後一人は恐らく目の前に広
がる絶壁の中にいるのだろう

その目的が私の殺した様子を見て援軍を呼びにいったのか、それと
も拉致用の檻でも見ているのか

どちらにしても面倒な事には変わりはないだろう。

目の前の絶壁にはいくつもの穴が開いており、見える範囲の中には
階段まで見えている

高い場所には穴から穴へ移動する為なのだろうか？絶壁の崖に木
でつくられた梯子板のような物

崖を利用して作られた要塞型の遺跡を更に盗賊が改悪した形がア
レなのだろう

まるで不格好な積み木だ

【どちらにしても殺す事には変わらんか】

一体中には何人いるのか、そしてそれを一度も死なずに全滅させる
ことが出来るのか

そして心象を全て飲み込むほどのソウルへの渴望が彼を遺跡へと
導いていった。

『闇派閥の盗賊団地2』

不死者には三種類の存在がある、痛みを感じる者、ほとんど痛みを感じる機能が無い者

そしてソウルを求めるただの亡者と化した者だ

不死者としてのあなたは前者でも後者でもない者、つまりは痛みを感じる機能がない者である

生きている者ならば確實に直面するであろう痛み、これは物理的な物も精神的な物も含める

あらゆる戦士が希望を向けるその不死者としての機能は本人からすれば、この上が無い程に迷惑だ

何せ自分がいつ死ぬかが分からぬ、そして痛み、つまりは触る覚がないという事

つまりは五感全てが死に絶えているといつても過言ではない事実であるからだ

戦い続ける喜びを知らぬ、味わい続ける痛みを知らぬ、そして幸せという絶望を知らぬ

それが不死者として、最初の薪の王にして最後の薪の王として、それが最後に残つた残滓の私だ

【「しかしこの世界はどうなつてゐるのか】

私は頭の中にふと発生した疑問を口にした、馬車で拉致されてから頭の中に存在していた疑問符

まるで、それが疑いようのない常識として存在していると言つても差し支えないほどに存在する。

なぜこいつらは理性ある目で睨んでいたのだ?と。

そう、私が燃え尽きた後に復活する時は大体世界の終焉の時である、故に理性ある者は存在しない

仮に存在したとしても不死者か、火の無き灰か、それが神の血を引く者か神そのものである

しかし目の前に存在する私が殺した者達は、最早思い出す事もでき

ない程に遠くの記憶に位置した

そう、こいつらは人間なのではないか？と

文明の火が灯つた場所に生きている人間なのではないか？ そう考
えてしまつても仕方がないだろう

住んでいる者は全員殺すのだが

意を特に決せずに入口に位置しているのであろう両開きの扉を蹴り跳ばし中へと突入するが

中はもぬけの窓たエントランスと言ふる程に円形に広にられた場所には盗品であろうか？

高級そうな椅子が散乱しているか机がない
乱しているのは奇妙だ

恐らくはこの奥に机で速攻のバリケードでも作っているのだろう待ち伏せを見破る能力は不死者としての嗜みだ、これで椅子も持つていかれてたら流石に分からなかつただろうが、盗賊連中が阿呆で助かつたと言つたところか。

レストランくらいだろう】

エントランスの奥に続いているのであろう道へと歩き始める

自分の歩く音だけが無音と共に流れ始める程の沈黙。長く続いている廊下の床にはあらゆる種類のゴミと木箱が散乱しているが自分のソウルに適合するような道具は何も落ちていない。

死体から物品を拝借するのが主だった冒険をしていた身としては落ち着かないのが本音である。

『最早城と呼ぶには相応しくない血のこびり付いた象牙の塔が治める場所

巨人用の拷問器具と疑問を持つ程に巨大なアイアンメイデンの中
央が開き

中から人の命を軽々しく奪える量の殺意が三重奏の音楽に乗せ

られる

城を相手にしていると錯覚する程に連射され

る太矢』

塔のラトリアという地名が頭の中にふと浮かび上ると同時に体中にボウガンの矢が剣山の様に生えるという奇妙な映像が頭の中を支配した

【…盗賊と言えど舐めるのはやめておくか…よく考えればエスト瓶を持つていないしな】

エスト瓶を持つていないのは復活時にはよくある事だが今回の復活はそれ以上に不明な点が多い

不死の宝であるエスト瓶を持つていないのも加えて先ほどの盗賊の所持品にもエスト瓶は無かつた
加えて武器の耐久度だ、あの盗賊から^{ドロップ}簒奪したダガーの耐久度は数值にして10だ

およそ火継ぎの時代の刀部類の耐久度のおよそ二分の一以下だ
アンドレイが見たら別の意味で度肝を抜かれるのではなかろうか、無論悪い方の意味でだが。

こんなダガーでは火継ぎの旅に耐えれそうにない

そして何故耐久度で疑問を感じるかの答えも火継ぎの旅に関係している

大概火継ぎが行われる時は世紀末か終末か世界が終わる時だ、基本的にはという言葉が付くが

亡者化を治したい、聖女の旅に同行するなどはこれに含まないとする

そして火継ぎは世界を救う事に該当するだろう、大体の国はそう考えている

故に誰が火継ぎを行うかは基本的に早い者勝ちという事であり火継ぎを成した国は例え小国であろうと大国が如き意見を発することが許されるのだ。

故に例え一般兵士にも常時であれば王の近衛兵の様な装備を許される、そして近衛兵には国宝を

英雄には昔話に出てくるような伝説の装備をと言った感じである
だが伝説如きで火継ぎが成せる筈が無く、故に過去の英雄であろう
と故知らぬ死体として扱われる

そして伝説の武器もどんな大国の宝剣も全てが私の懷に入るのだ、
不死者は最高だぜハツハー！

話が逸れた

例えるなら盜賊と言えども火継ぎの時代であれば高品質な武器を
持つていても不思議ではない事だ

だがこのダガーに刻まれた情報を見るに、このダガーは低品質の量
産された物だ

昔手にしていた折れた直剣の方がまだ丈夫であるのだから、この時
代はよほど平和なのだろう。

そんな事を考えながら移動しているとどうやら牢屋のような場所
に着いたらしい

両脇に広がる鉄格子の部屋の中には連れされて来たのだろうか
？数人の女性の姿が見える

年齢も容姿も服装もバラバラだ、少女よりも幼い存在がいればその
親と見受けられる女性もいる

熟練の女兵士のような存在もいれば裏路地の酒場で妖艶な踊りを
披露している様な服装の女性

褐色肌の黒髪もいれば綺麗な黄金の色をした髪を持つ耳の長い女
性

一番目立つのは獸の耳を持つ女性たちだろうか？アレはどうなつ
ているのだ、生物学的に。

瘤角のグルーの様に意思を持つ人間以外の種族なのだろうか？
褐色の人間もそうだ、何故だろうか？あの者達からは美味しそうな
ソウルの匂いがする

もつと言つてしまえば、彼女から漂う魂の匂いは神の下僕たる甘く
美しく退廃的な匂いだ。

【シラを殺した時と同じだな、怖氣と甘美な氣配漂う神の使途としての匂い】

鉄格子の出入り口であろう場所を握り、前や後ろやら横に揺らすが鉄格子の扉はびくともせず

中に入いる娘たちも氣だるげな眼を虚無へと向けているのみで何のリアクションも起こさない

目の前の物事に集中できない様はまるで全てに絶望しきつた亡者そのものである

そんな亡者に何回も殺され続けた私がそんなことを言うとまるつきりに喜劇の様であるが

そもそも14歳の体でロードランを一度も死亡せず走破しろという方が無理だろう。

話しが逸れた、しかし目の前の亡者状態な者どもはどうしたものか【現状無理であれば何も気にする事はないか、恐らくは盗賊の頭を殺せば解決する流れだろう】

そんなに回数は無かつたが似たような状況はロードランやロスリックではよくあつた

特にカタリナ騎士に巻き込まれた時は毎回の様に敵を殺したり鎧を探したり敵を殺したりした

思えばカタリナの者達は騙されすぎではないだろうか、ジークの一族がそういう血筋なのかな？

牢屋の横に存在していた凱旋状に続く階段を上りながら考える途中存在する階層を散歩気味に探索するが特に良い物はなく食糧庫やら持ち出された形跡のある

装備置き部屋や、盗賊の団員が寝泊まりに使つていただろう集団仮眠部屋だけだ

装備置き部屋と聞いてテンションの上がった者には申し訳ないがクラブすら残つてなかつた

そもそも装備が持ち出されている状況で残つてている方がおかしいのだがな

私が旅してきた道筋では道端に武器持つた死体が転がっているな

ど珍しくもなかつたし

そしてそんな死体が襲い掛かってくるのも珍しくなかつた

更に言えば死体を更に殺し全ての武器を簒奪するのがライフスタッ
イルだつた

そんな凄惨とも言える素晴らしい生活をしていた身からすれば、こ
の盗賊の団地とも言える場所は

とてもではないが満足のいくダンジョンではなかつた

ここまで盗賊であろう者達に遭遇したのは牢屋が付いた馬車から
逃げ出す際に殺した三人のみ

恐らくあの時に見回りか偶々あんな凄惨な殺人現場に遭遇した者
がここに物に知らせたのだろう

であればここに住居者である盗賊たち全員が一点の場所に集まつ
ている可能性が高い

〔軍団タイプのボスか、苦手なんだがな…個々が弱そうなのが救いか〕

そう言いながらきよろきよろと周りを見るのはカツコつけを言つ
ておきながら小心者を隠す様な

仕草ではあるが、事実は全く違う、彼は単に白靈を探しているだけ
である

その心の内は既に明鏡止水の殺意に到達しているレベルで一心に
殺意満タンだ、殺す気しかない

誰一人として盗賊を生きて返す気など存在していない。

〔…そいういえば初めてあの世界で目覚めた時も周りにアストラの騎士
以外誰もいなかつた〕

いつの間にか牢屋に押し込められ、化け物と見紛う亡者と呼ばれる
人間と同じ存在として囚われた

偶然助けられたアストラの上級騎士に大いなる使命に託され、そし
て心を躍らせたのは何年前か

最早存在しえぬ程の遠くにある記憶には、未だにあの頃の燃え盛る
憧れが沸き上がるようだが

そもそも直ぐに鎮火する、冷静な判断を下す事にはこの様な炎は判断
を英雄的な思考へと誘導する

考えはいらぬ、私はただ生き残る為に目の前の者を殺す方法を考え
ればいいのだ

【上った先にある霧の壁か、まるで伝承に聞く鏡の騎士へ至る道の様
だな】

凱旋階段を上った先、目の前にあるのは霧の壁

十中八九中には盗賊がいるのだろう、何人か？何十人か？それとも
何百人かにまるで畜生の如く

私は廻殺されるのか？それともクロスボウで串刺しだろうか、とな
ればとりあえず盾がいる

霧の壁があるエリアはまるで円形に広がった場所だ、剣闘士集うコ
ロシアムの待合室のようだ

となれば使えそうなものがあるかもしれないと見渡すと、ある一点
が導きの光があつた

これ幸いと近づくと、その目の前にあるのは鉄格子の扉だった、何
故こんなところにという疑問は

あるがこれしかないと成れば使用するほかあるまい。

【ふむ、戦技で一定範囲の攻撃を完全無効化か、見た目にそぐわざ結構
使えるな】

左手に鉄格子の扉、右手にダガー、全身には鉄鑄びた甲冑というど
この気狂いですら目を背ける

そんな存在になつてしまつてしているが灰の者にとつては全力を出せ
る完璧な装備だ

盾と武器さえあればいい、それさえあれば相手を確殺できる

覚悟はできた、周りに白靈がいないのはマイナス点だがいない物を
憂うよりある物で戦うしかない

今揃えられる限界点までは揃えたんだ、これであとは蘇り戦法で逝
けるだろう。

【さてと、行くか。】

覚悟を声として外に出しながら霧の壁へと手を潜り込ませる、霧で
ありながら質量があり

体をくぐらせる時には鎧の中へと入り込み自身の肌を氣味悪く撫

で、いつ体験しても気持ち悪い

入つてから一瞬が経つ、特に何かが起ころる様子も無かつたが静寂は時として瞬間に切り替わる

轟音だ、最早耳を機能させる事すら不可能な程の音の暴力が俺に襲い掛かる

それは攻撃として歩数にして二十歩ほどの距離を騎士甲冑を着用し重量が行動ギリギリな程の私を

軽々と吹き飛ばし追い打ちとして降りかかる子供の身長ほどはあろう手のひらを潜り込む様に回避

内側に潜りついでとばかりに襲撃者であろう足先しか見えぬ程の巨大な足首をダガーで切り裂くが

恐らく気のせい程のダメージしかないだろう、予測できる程度の血しぶきしか流れ出なかつた

襲撃者の後ろ側に回り込み、ついにその全容を眼で『視認』し確認する

瞬間、俺の頭は見事な血の華を咲かせ、その場に溢れる脳汁と血液のプールに倒れ込む事と成つた